

上流仙人橋を渡つて爪頭上りの長坂四五町程登れば古びた温泉宿が並んで、三昧の音、尺八の音、唄も聞える、此處が所謂秋保の温泉だ。

佐勘屋といふに道具をおろす。時に八時だ。何はともあれ疲をぬくために早速湯にはいる、浴室は粗末ではないがまるで音曲の稽古場といった有様、仕切なしの追分、ラツパ節、乃至ナンテマガインデシヨ節が絶えない。飯を食つてから間もなく床に入る、と雨が降つて来た、さあ明日の寫生が氣がかりで眠られぬ、色んなことを考へてる間に温泉の夜は更けて夜廻りの拍子木の音が寂しく聞える(某月一日)

四時に目覺む、顔も洗はずに寫生箱引つぱり出して川岸の崖縁に行く、彼方には翠巒長く續き其の中に見上ぐる芝山の様な滑かな丸い山が、まだ明けやらぬ灰色の空に接して、其はてにコバルトの連山が遙かに見える、そこをと、思つて早速三脚を据える、一時間程無言の業、描き終る頃に綠色の山また山は波濤の如く朝日に輝き出した。宿に歸り食後浴室を寫生する。それから又先の川岸の崖をおりて行くと途中に河原の温泉といふのがある、寛の水は水盤に溢れて落ちてゐるのに其又水の中には白の山百合が崩れる様に咲き亂れて、甘い香が頻りに鼻を襲つてくる。下へおりて行くと丸木橋が架かつて、川の兩岸は翠巒屏列して皆巉岩よりなつてゐて、瀧あり奔湍あり、碧潭あつて非常に畫題に富んでる。此處で道具を開き上の温泉宿を寫生する。ラストタツチを入れてる頃は身の圍りに沿客連が集つて

た。宿へ歸り晝飯後二三の鉛筆スケツチして歸途につく。家に著いたのは午後四時だつた。(某月二日)

野人語録

臺州 片 葉 子

○S君は書齋一ばいに、水彩畫やら、繪はがきやら張りたてて、得意がつて居る。御自身では美術家位にうぬぼれ給ふが、僕などの様な畫の意味の明らないものには、一向有難くも面白くもない。ごてごてした所、何だか繪はがき屋見た様だ。

○その又繪と云つたら、赤い繪具や、黄色い繪具やら、無暗に落してあるばかり。見てさへ早や胸先が悪くなる氣持がする。何だといへば、これが島だ。これが船だとき。奇想天外より落ちるとは蓋しこの事だ。須らく島や船に名札を付けて、見る人の誤解を矯め、奇想の落ち來る所を知らせるの必要がありはすまいか。

○S君が曰く、「繪を見て呉れる人の無いのは、僕の一大不満だ。この繪は、口で説明したつて分かるものでない。見る人の感想に突入つて、始めて價値が現れるのだ。天才を待つて始めて解せられるのだ。」と。

○僕は恥しめられた様な氣がした。僕の存在をS君は認めて居らぬ。無論批評などといふことは、こちらが御免蒙る方だ。けれども畫といふものは、畫かきが見て始めて分かるものかな。約束づくでわかるのなら、どこが文學と選ぶ所があるか。

○吾人百姓の感情にも觸れ得る様に、色や形を描立ててもらひたい。これが畫家君に對する、吾人の希望の全部である。

○私等は人を招く様な時には、部屋はよくかたづけ、塵一本でも落さぬ様にする。床の上にいる人なものを積立てたり、柱に古着をぶらさげたりする様な事は、失禮だとかねがね思つて居る。

○一寸失禮だが、S君の繪はがき主義とくらべて見た。

吾人の主義は、果然無裝飾の裝飾とでも、いふ様なものであつた。S君、幸に味ひ給ひ得ば幸甚。

○庭に自然に生へる艸なら生して置け。自然に落ちる木の葉は、掃き捨てずにと。是が自然主義といふ肩書の付くS君の言。秋の末、山寺の垣根の下に、木の葉が一面に散り敷いて居る所などは、いかにも寂みがあつて、S君たまらない程よい相だ。あれだから、清水の立派な焼を、尋常一年の子供の、粘土細工と取りかへて、得意がられるのだ。

無裝飾の裝飾主義者たる吾人は、飽く迄掃きすてゝ、ぬきすてて、清めに清め上げよといふのである。

○變化の大切な事ばかりを、口を極めて主張し給ふ。成る程大切は大切。然し吾人は變化のみが、唯一の美の要素とは、決して思ふては居らぬ。人の變化を云ふ時に、吾人は反抗的に、嚴正をかつぎ上げたく思ふ。借問す、行儀よいのと、じだらくなのと、どちらがよい。

徳島へ

徳島 成節 生

コバルトとローズとを流したやうな、うららかな彌生の日、スケツチ箱や三脚を友として、徳島公園へ出かけた。ここは舊藩主蜂須賀侯の城趾で、四時の眺め悪しくはない、道程三里、妻縁、菜花を以て織りなせる錦の上を歩いて行つた。

公園は到る處春の光が行きわたつて、芝生は一面のエメラルドグリーンに、櫻花はローズマダーに、松といはず、杉といはず、柳も、樅も、皆冬の衣をぬぎすてて、春衣を飾つて居る、ベンチにも、木蔭にも、高き所も、低き所も、わかきあり、老たるあり、男あれば、女あり、瓢さげたるあれば、握飯結びたるあり、といふ様、千態万様とは、こゝでは生きた形容語、私は鐵面皮にも、スケツチ箱を開いた、遠景に眉山、中景に松林、近景には爛熳たる櫻樹、(月並ではあるけれども)寫しはじめた。物珍らかなので、人の山が周圍にできた、口から生れた見物人、あれが眉山、それがあの松林、今のが櫻など、うるさくつてしかたがない、それでも八ツ切、十六切、二枚は物になつた、終ると氣が清清した。すぐ中央なる城山へ上つて四方を打眺めた、足下は人口六萬の徳島市街、近くは銀針の如き吉野川、紀淡の海を隔てて、東北遙かなるは紀攝の連山で、煙の様に淡く霞に包まれて居る。私はかゝる境へ來ると、いつも自然の偉大崇高といふ感にうたれるのである、西の空がオレンジに輝いた時分歸途についた。